

月見草

遠くと近く 視点をどこに置くか？

東京湾の水中写真で有名なカメラマンが、ラジオのインタビュー番組でも興味深い話をしていた。

「東京湾に初めて潜ったのは高度経済成長期の、海が最も汚れた時代でした。潜ると、おそろしく透明度のない濁った水の中から、卵をいっぱい抱えたカニが、急に襲ってきました。…大切な自分の卵を守るために、自分の身体の何十倍もある私に命がけの攻撃を仕掛けてきたのでしょうか。公害に負けず、こんな汚い海でたくましく生の営み続ける生き物たちの姿に私は心惹かれました。東京湾の生き物の写真を撮り続けた理由はそういうことです。そんな私を環境カメラマンとよぶ人がいますが、実は、私はそう言われるのは心外なのです」



彼は東京湾の濁りの中で写真を撮り続けている間に、澄み切ったきれいな海で写真を撮るのとはまったく違った視点を発見したと言う。「澄み切った海中では、ズーっと向こう側にあるかもしれない被写体を探すのです。しかし、濁った水の中ではそれは無理なので、すぐ手元にある生き物を探すということになります。手元にも私にとって素晴らしいものがいっぱいあるのです。…こういう経験を重ねている間に私の視点が少しずつ変わってきました」というこのカメラマン氏は、「限られた地球の環境を守るために、と人は言うのですが、そういう遠くを視野において環境問題に取り組むような甘い考えではダメだと私は思うようになりました。もっと自分の手元を見つめる活動でなければいけないのではないかと言葉を続ける。

私はこの話を聞きながら、今まで相談室で出会った多くのクライエント（来談者）のことを思い出していた。彼らの多くは、相談室とは無縁な、生きることに何の疑いもないように見える人たちと比べて、澄み切った視野の中で生きていたような気がしたからだ。その意味ではクライエントはみんな哲学者であり私の師匠であって人生の多くの真実を見せてくれた。…それだけに人生の先、心の深淵を見ようとして行き詰まっていたのである。

しかし、このカメラマンの言葉を手がかりに考えるとき、彼らの多くが、遠くの目標物を見ようとするとあまりに、目の前のものを見落としていくことが多いように思われる。そして、カウンセリングの終了が近づくころになると、誰も身近な生活の中に楽しみを見出しあんがい平凡な人間に戻っていく。…こういう過程を考えてみると遠くを焦点化するのも近くを焦点化するのも一長一短があつてどちらが良いとは言えないような気がする。強いて言えば遠近のバランスを上手に取りながら物事を見て生きているのが達人の生き方なのかもしれない。…しかしそういう生き方は意識してできることではないのであろう。

登山のため北海道の利尻島に渡った。しかし悪天候のため五合目で諦め、利尻から十数キロ離れた礼文島に向かった。せめて礼文から利尻岳を見たかったのである。けれども礼文に二泊しても雨と霧と雲のため山は見えないかった。

憧れの恋人は思いがけず礼文から稚内に向かう船に乗っているとき姿を見せた。鉛のような空と海が急速に開き、青空とコバルト色の日本の海のように標高一七二一メートルの利尻岳がその雄姿を見せたのである。私は興奮して甲板上で夢中にシャッターを切り続けた。私は何枚もシャッターを切っている間に、すぐ手前を何羽ものウミネコが飛び交うのに気付いた。しかし、ウミネコをフォーカスすると利尻がかすみ、利尻にフォーカスするとウミネコがボケるには困った。

「富士には月見草が似合う」…この時シャッターを切りながら私の脳裏をこの言葉が掠めた。太宰治は目の前の月見草よりも、本当は澄み切った遠くの富士を見る人だったのではないか？ …私はそのとき、ふとそう思うのだった。

